様　式　Ｃ－１９、Ｆ－１９－１、Ｚ－１９　（共通）

科学研究費助成事業　　研究成果報告書

令和　５ 年　６ 月 ２６ 日現在

機関番号：３４３１６
研究種目：基盤研究(C)（一般）
研究期間：2017～2022
課題番号：１７Ｋ０２２７３

研究課題名（和文）「フランス現代思想」による「学校」批判と教育実践に関する理論的・歴史的総合研究

研究課題名（英文）Critique of the School in Post-'68 French Thought

研究代表者
廣瀬　純（Hirose, Jun）

龍谷大学・経営学部・教授

研究者番号：７０３８８１５６

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費）　　3,400,000円

研究成果の概要（和文）：フランスの「68年思想」の中心には「学校」批判があり、ルイ・アルチュセール、ジャック・ランシエール、フェリックス・ガタリ、ジャック・ラカン、ピエール・ブルデューなど、同思潮に属する思想家たちのあいだでは「学校」をいかに捉えるかが争点となっていた。本研究ではこの観点から「68年思想」の全体像を捉え直した。

研究成果の学術的意義や社会的意義
20世紀後半のフランスの思想家たちのあいだでの学校をめぐる議論は、21世紀の日本において学校を考える上で有益な示唆に富むものである。

研究成果の概要（英文）：French post-'68 Thought has critics of "school" at its core and the question of how to see the "school" constitutes the main point of dispute among its thinkers. In our research project, we tired to remap the whole French post-'68 Thought from this point of view.

研究分野：哲学

キーワード：フランス現代思想　学校　68年思想　ルイ・アルチュセール　フェリックス・ガタリ　ジャック・ラカン　ピエール・ブルデュー

※科研費による研究は、研究者の自覚と責任において実施するものです。そのため、研究の実施や研究成果の公表等については、国の要請等に基づくものではなく、その研究成果に関する見解や責任は、研究者個人に帰属します。

様　式　Ｃ－１９、Ｆ－１９－１、Ｚ－１９（共通）

１．研究開始当初の背景

フランス現代思想について、同思潮に属するとされる思想家たちのあいだで「学校」が主たる論点となっていたということ自体、着目されたことがなく、したがってまた、「学校」批判として同思潮全体を整理しようと試みる研究も存在していていなかった。
アルチュセール派における学校批判
本研究は、フランス現代思想における学校批判の思想的射程について、ラカン派精神分析運動との関連から検討を行った。一九六〇年代にラカンは、主流派精神分析と訣別し、独自の分析家団体制度を設置したことで、精神分析の新たな潮流を生み出したが、その際、「教育」は本質的なテーマであった。彼が実施した精神分析制度改革（自身の分析家集団としての「学派 école」の設立（1964）、また内部での資格制度の改革（「パス」制度の提案、1967））においては、治療に還元されない精神分析経験、及びそれにより生じる知とその伝達ということが大きな課題として議論された。それは、制度的に承認された教育者の権威に依存しない、教育のあり方を模索するものであった。

２．研究の目的

日本語環境で「フランス現代思想」と呼び慣わされている思潮（フランス語環境などでは「68 年思想」と呼ばれている）全体を「学校」批判と捉えた上で、主としてアルチュセール派、ラカン派、ガタリ派において「学校」がいかにして論点として浮上することになったのか、いかなる議論がなされたのかなどを明らかにすることを目的に研究を行なった。

３．研究の方法

文献調査と研究協力者へのインタヴューとを中心に研究を進めた。
アルチュセール派については、エティエンヌ・バリバール、クリスチャン・ボドロー、ジャック・ランシエール、ロジェ・エスタブレにインタビューを行なった。ウェブサイトで公開されたその記録は各方面から注目を集め、英語、スペイン語に翻訳された。
　ガタリ派については、アンヌ・ケリアンとフランコ・ベラルディにインタヴューを行なった。そのうちケリアンへのインタヴューもウェブサイトで公開した。
　ラカン派については、エリック・ロラン、マリ＝ジャン・ソレ、パスカル・マカリ＝ガリピュイ、ピエール・ブリュノへのインタヴューを行なった。

４．研究成果

<u>アルチュセール派</u>

バリバール、ボドロー、エスタブレは、ピエール・マシュレ、ミシェル・トールとともに、1968-1969 年に行われたアルチュセール派による「学校」共同研究に参加していた。バリバールによれば、この「学校」共同研究は、アルチュセールの指導なしで、〈68 年 5 月〉の前後からアルチュセール派のイニシアティブで行われたものであり、学校諸装置を階級関係の再生産の装置として定義するという方向性で理論化を進めていた。その成果は、アルチュセールの『再生産について』（1969 年）、「イデオロギーと国家のイデオロギー諸装置」（1970 年）に大きな影響を与えることになるが、残念ながら「学校」共同研究は成果を公表することなく活動を終えたため、この影響関係はこれまでまったく指摘されることがなかった。

　共同研究の成果はボドロー＝エスタブレ『フランスにおける資本主義的学校』（1971 年）に引き継がれるが、その中で彼らは、学校諸装置が初等教育から、プロレタリアートとブルジョワジーの再生産を行う二つの装置に分割されていることを指摘する。ブルデュー＝パスロンは『遺産相続人たち』（1964 年）、『再生産』（1970 年）において、高等教育における階級分割を「文化資本」という概念によって説明していたが、ボドロー＝エスタブレ『フランスにおける資本主義的学校』は、そのような階級分割が初等教育から存在し、階級関係の再生産のために機能していることを、統計を使って綿密に証明した点において、画期的な仕事であった。

他方、『アルチュセールの教え』（1974 年）でアルチュセール批判を開始したランシエールは、〈68 年 5 月〉を、「学校を問題化したのではなく大学を問題化した」と再定式化する。彼によれば、アルチュセールは論文「学生問題」（1964 年）以来、学校を「科学的知識の獲得の場」とするフランス共産党のイデオロギーに忠実であった。ランシエールがマオイズムの立場から批判したのは、知識人が知識を与え、大衆が学ぶというこうした硬直した革命モデルであり、ランシエールはこれを転倒して、大衆が知識人を教育するという方向性から彼自身の理論を展開した。この理論は、後に『無知な教師』（1987 年）において、「知性の平等」というテーゼへと拡張されることになる。

ラカン派

第一に、議論の歴史的背景として、精神分析理論と教育理論との接点を一九二〇年代の精神分析運動に遡って検討した。精神疾患の治療の領野から登場してきた精神分析であるが、当時、非行少年の矯正といった社会的分脈のもとで、「教育」は精神分析の応用領域のひとつとして特に注目されていた。またこの領域は、医師ではない精神分析家（特に女性分析家）の多くが活躍する土壌ともなったことが明らかになった。この解明によって、ラカン派精神分析による革新へとつながるような、精神分析と教育制度との関係の歴史的条件が確かめられた。

第二に、ジャック・ラカン自身による大学批判の射程を、彼が「反哲学」と呼ぶものとの関係において明らかにした。知られるように、六八年五月を機に設置が決定されたヴァンセンヌ大学実験センター（現パリ大八大学）には「精神分析」学部が設けられ、その講師として、セルジュ・ルクレールをはじめとするラカン派の分析家が招かれた。その際、「精神分析」は「心理学」ではなく、「哲学」の管轄のもとに運営されることになったのだが、その後、七四年にラカンが精神分析学部の改革に直接介入した際、彼はその学部で教えられるものとして挑発的に「反哲学」を掲げている。一見すると「哲学」部と「精神分析」学部の政治的イデオロギー闘争にも由来するように見えるこの挑発は、のちに A.バディウもまた正当に評価するとおり、大学こそ「真理」との分裂によって「知」の生産を指示する装置であり、哲学はそれを補完する主体を提供するに過ぎないとする認識に裏付けられている。これに対し、ラカンが唱えた「反哲学」は、存在に先立つ〈一者〉概念への注目とともに、論理形式の重視によって教育を実現することを目指すものである。こうした「反哲学」のアイデアこそ、知の相互伝達の場である「学派」と並び、大学教育のオルタナティブとして提示されたものであることを明らかにした。

第三に、一九七〇年代以降の教育理論におけるラカン派精神分析的パースペクティヴからの介入について、特にジャン＝クロード・ミルネールの議論を手がかりに検討した。ジャック＝アラン・ミレールのエコル・ノルマルの友人であるミルネールは、ラカン派精神分析から深い影響を受けた思想家である。フランスでは八二年に L.ルグランの報告を受け、早期選別の撤廃や社会的要請への応答を主張する、教育の“ 民主的 ”改革の議論が生じたが、その際、ミルネールはこれを知の制度化不可能性を尊重することなく、官僚主義的な制度にそれを翻訳する試みとして批判し、「知」への愛の場としての学校を擁護した。一方で、保守的な知識人擁護論とも受け取られる議論であるが、他方で上述のラカンの立場からの影響を考慮すれば、これを、大学言説が六八年以降、いっそう資本主義市場との親和性を深めていくことに対する批判的応答として捉えることも可能である（ただし、ラカンの「反哲学」との関係からミルネールを批判することもまた可能であろう）。いずれにせよ、大学・教育

現場と市場は、新自由主義の導入以来、ますます親密性を深めており、知はますます商品へ、教育はますます自己経営する主体の生産へと化していくなか、ラカン派精神分析は、改めて教育において生じる主体的経験について、洞察を深めるために必要なアイデアを提供するものと考えられた。

ガタリ派

雑誌『ルシャルシュ』で「学校」や「教育」が繰り返し特集され、ガタリ派において同テーマが重視されることになった経緯、また、とりわけアルチュセール派やミシェル・フーコーによって同時代に提出されていた議論のガタリ派での受容などが明らかとなった。

５．主な発表論文等

〔雑誌論文〕　計9件（うち査読付論文　1件／うち国際共著　3件／うちオープンアクセス　4件）

１．著者名 Querrien, Sato, Hirose	４．巻 -
２．論文標題 Critique de l"ecole dans la pensee francaise post-68 (2) : Entretien avec Anne Querrien	５．発行年 2021年
３．雑誌名 Laboratoire d'analyse critique des modernites	６．最初と最後の頁 -
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 該当する

１．著者名 Baudelot, Sato, Hirose	４．巻 -
２．論文標題 Critique de l'ecole dans la pensee francaise post-68 (3) : Entretien avec Christian Baudelot	５．発行年 2021年
３．雑誌名 Laboratoire d'analyse critique des modernites	６．最初と最後の頁 -
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 該当する

１．著者名 Balibar, Sato, Hirose	４．巻 -
２．論文標題 Critica de la escuela en el pensamiento frances post-68 // Entrevista a Etienne Balibar	５．発行年 2021年
３．雑誌名 Laboratoire d'analyse critique des modernites	６．最初と最後の頁 -
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 該当する

１．著者名 上尾真道	４．巻 1
２．論文標題 精神分析運動と女性性の問い　応用としての教育の視点から	５．発行年 2018年
３．雑誌名 精神医学史研究	６．最初と最後の頁 12-17
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

1．著者名 上尾真道	4．巻 21-1
2．論文標題 精神分析運動と女性性の問い――応用としての教育の視点から――	5．発行年 2018年
3．雑誌名 精神医学史研究	6．最初と最後の頁 45-55
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

1．著者名 佐藤嘉幸、廣瀬純	4．巻 2018年3月16日号
2．論文標題 新たな主観性から新たな社会編成へ	5．発行年 2018年
3．雑誌名 週刊金曜日	6．最初と最後の頁 29-31
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

1．著者名 佐藤嘉幸	4．巻 1
2．論文標題 ポスト構造主義から人民の政治的自己決定へ――ピーター・ホルワード「自己決定と政治的意志」への応答	5．発行年 2018年
3．雑誌名 多様体	6．最初と最後の頁 87-93
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

1．著者名 佐藤嘉幸、廣瀬純	4．巻 0
2．論文標題 Una strategia e tre tattiche per la rivoluzione in Deleuze e Guattari. I proletari, le minoranze e l’uomo	5．発行年 2017年
3．雑誌名 Commonware	6．最初と最後の頁 web
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 －

１．著者名 佐藤嘉幸	４．巻 47
２．論文標題 De l ’appareil d ’Etat aux dispositifs de pouvoir : A propos de Theorie et institutions penales et La societe punitive de Foucault	５．発行年 2017年
３．雑誌名 Zinbun	６．最初と最後の頁 91-108
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

〔学会発表〕　計10件（うち招待講演　5件／うち国際学会　2件）

１．発表者名 上尾真道
２．発表標題 解散の大義　「解散の手紙」を読む
３．学会等名 Autres ecrits研究会第2回
４．発表年 2018年

１．発表者名 Jun Fujita Virose
２．発表標題 May 68 in Delouse and Guattari
３．学会等名 リスボン新大学哲学研究所国際シンポジウム Critical May 68（招待講演）（国際学会）
４．発表年 2018年

１．発表者名 佐藤嘉幸
２．発表標題 上部構造の相対的自律か、経済決定論か
３．学会等名 社会思想史学会第43回大会
４．発表年 2018年

１．発表者名 上尾真道
２．発表標題 ラカン派精神分析と「エコル」の問題――J.-C.ミルネール『学校について』を契機に
３．学会等名 研究会「フランス現代思想と“学校”批判」
４．発表年 2018年

１．発表者名 上尾真道
２．発表標題 精神分析運動と女性性の問いー応用としての「教育」の視点からー
３．学会等名 第21回日本精神医学史学会シンポジウム「精神分析運動の歴史」
４．発表年 2018年

１．発表者名 佐藤嘉幸、廣瀬純
２．発表標題 『三つの革命――ドゥルーズ＝ガタリの政治哲学』をめぐって
３．学会等名 叛乱研究会（招待講演）
４．発表年 2018年

１．発表者名 佐藤嘉幸
２．発表標題 フランスにおける資本主義的学校』と『再生産』――アルチュセール派としてのボードロ＝エスタブレとブルデュー＝パスロン
３．学会等名 研究会「フランス現代思想と“学校”批判」
４．発表年 2018年

１．発表者名 佐藤嘉幸、廣瀬純
２．発表標題 ドゥルーズ＝ガタリとは誰だったのか？
３．学会等名 八重洲ブックセンター『三つの革命――ドゥルーズ＝ガタリの政治哲学』刊行記念トークショー（招待講演）
４．発表年 2018年

１．発表者名 佐藤嘉幸
２．発表標題 『ラカニアン・レフト』へのコメント
３．学会等名 社会思想史学会（招待講演）
４．発表年 2017年

１．発表者名 佐藤嘉幸、廣瀬純
２．発表標題 Trois tactiques de la revolution chez Deleuze et Guattari
３．学会等名 Colloque "Penser l'emancipation"（招待講演）（国際学会）
４．発表年 2017年

〔図書〕　計4件

１．著者名 Jun Fujita Hirose	４．発行年 2021年
２．出版社 Tinta Limon	５．総ページ数 128
３．書名 Como imponer un limite absoluto al capitalismo	

1．著者名 王寺賢太、立木康介、佐藤淳二、小泉義之、佐藤嘉幸、廣瀬純、上尾真道、田中祐理子、布施哲、市田良彦	4．発行年 2019年
2．出版社 読書人	5．総ページ数 274
3．書名 <68年5月>と私たち：「現代思想と政治」の系譜学	

1．著者名 王寺賢太、立木康介	4．発行年 2019年
2．出版社 読書人	5．総ページ数 324
3．書名 ＜68年5月＞と私たち	

1．著者名 佐藤嘉幸、廣瀬純	4．発行年 2017年
2．出版社 講談社	5．総ページ数 352
3．書名 三つの革命　ドゥルーズ＝ガタリの政治哲学	

〔産業財産権〕

〔その他〕

－

6．研究組織

	氏名 （ローマ字氏名） （研究者番号）	所属研究機関・部局・職 （機関番号）	備考
研究分担者	佐藤　嘉幸 (Sato Yoshiyuki) (90420075)	筑波大学・人文社会系・准教授 (12102)	
研究分担者	上尾　真道 (Ueo Masamichi) (00588048)	広島市立大学・国際学部・准教授 (25403)	

７．科研費を使用して開催した国際研究集会

〔国際研究集会〕　計0件

８．本研究に関連して実施した国際共同研究の実施状況

共同研究相手国	相手方研究機関